

## ドン会米作り2004(不耕起編II)

---

### 深水管理

7月10日(土) 忙しい日が続き、10日ぶりの田んぼになってしまいました。田植え後28日です。疎植と固い層への根付きの遅さから、ほかの田んぼと比べて寂しい状態が目に見えています。「そろそろ人並みになっているのでは」と言う期待がありました。期待は見事裏切られました。どうした事か水がありません。水持ちの良い田んぼで、12月から冬季湛水が続けましたが水が抜けることは一度もありませんでした。「深水をしなければならぬ時期なのに」と内心あせりを感じながら田を巡ると畦に大きな穴が開いているではありませんか。モグラかネズミの仕業です。補修はすぐに終わりましたが、この状態が何日続いたのか不安になります。稲作にかかる時間は、水管理が一番多いと聞かされてきましたがあらためて思い知らされました。中干し状態が何日続いたのでしょうか。10日前には一面にあったサヤミドロがなくなっていました。

---

### 中干し

中干しは、田の中に封じ込められた藁が醗酵し、生じたガスを抜くことがもともとの目的のようです。根腐れの原因になるからです。梅雨が明け、水温が高まることでガスの発生が多くなる日を見計らってこのガス抜きが行われます。中干し用の農具を長野で見ることがあります。水を抜いた田に簡単な溝を掘るもので、残っていた水がその溝を流れて流れます。密植する地域では無効分げつを少なくするために中干しします。横に伸びた根を地中深く伸ばす意味もあるようです。水がなくなった為、根は水を求めて地中深くもぐりこみます。千葉の不耕起栽培の藤崎農園は無肥料ですが、多すぎるバイオマスを抑えるために中干しが行われます。イトミミズの発生を抑えるためだそうです。私たちの不耕起栽培の田に、中干しの必要は無いようです。むしろ逆の深水が必要です。コナギを拾い、米ぬかと菜種かすを発酵させたぼかし肥を入れました。

---

### エチレン効果

深水の効果があったのか、たった一日で変化が感じられます。稲がイキイキ太くなっています。稲本来の開帳型で茎も太くたくましく、色も濃い。こうなると、中干し状態を都合よく解釈したくなります。水を求めて下に伸び、より固い層に到着しエチレン効果を発揮しつつ、そこに根を広げました。昨日とは見違えるほどです。田植えは二本植えと声を大にして指示しましたが初心者には既に分げつした早苗の一本株が二本に思えたのかもしれない

ません。一本植えと思われるところが多くあります。この一本植えと思われる苗が見事な開帳型になっていました。このたくましい苗が補償作用を発揮して隙間を埋め尽くすに違いありません。と、この時は信じていました。

エチレンは、発生して他の野菜を劣化させるガスとして冷蔵庫の CM によく登場しますが 100 年程前に発見された植物ホルモンです。冷蔵庫の CM では老化の促進、細胞分裂阻害がガスの作用として説明されますが稲の場合は、根の働きで固い層を耕して行くと言う効果を発揮する植物ホルモンです。

---

## 分けつ肥

こうして急激に生長すると養分補給のタイミングが心配になります。米ぬかは随分撒きましたがそれ以外は昨日の菜種かす少々です。稲が養分を求めているか否かは葉色で判断します。黄緑色は養分が足りず濃い緑が十分といった調べ方で基準となる色が 5 段階で表された色見表があります。濃い緑であれば良いのです、私たちの田は 3.5 程度。学校の成績表のようなもので 3.5 はまずまずの成績ということになります。肥料が必要かどうかは大きく伸びた葉と次に伸びる葉との比較です。次の葉が薄いようでしたら養分を求めています。葉の中央辺りの比較です。この調べ方にもタイミングがあるようです。幼穂形成期は葉色が退色して、そして又 V 字回復をするとのことですので注意しなければなりません。この田は十分のようです。

---

## 光合成

葉を取ってみると葉の幅が慣行のものと同分違うことに気が付きます。可愛い子に旅をさせ式の育て方のためか、茎だけでなく葉も大きく、そして厚く濃い緑です。葉は幅が厚く硬いとなれば病害虫に対して抵抗力は十分です。植物は空気中の二酸化炭素と太陽光により有機物と酸素を作り、放出します。これは自然界の大原則で、植物は太陽光を取り入れるために本能的、それを稲の開帳形が物語っています。扇形のように広がり一本一本が水際まで太陽光をあて生長します。太い分けつを発生するため、お互いの分けつが押し広げられると言うのは結果ではないでしょうか。

---

## 出穂

7月24日、播種後106日、田植え後42日。早朝に水位を調べ、夕刻に再び訪れました。同行者の「穂が出ている」の声には驚きました。近づいてみると確かにちらほら穂が出ています。朝は、気が付きませんでした。先週までの開帳型が立って来ていましたのでそろそろ幼穂形成期かな、次に来るときには幼穂を調べてみようと思っていた矢先でした。思わず「まずいな」と口に出たのは分けつがまだあまり取れていないからです。先週の段階

で 20 本でしたから 40 本はいけると皮算用をしていました。まだ先のことと置いていたので追肥もあまりしていません。それでも葉色は落ちていないのが救いです。

穂が出始めるのが早いのは、疎植植えだと葉齢の進み方が早いため、化学肥料を使わないため地温がわずかだが高いためなどと頭がフルスピードで回転しました。温度が影響するのであれば今年が早いのは無理ありません。でも他の田んぼはどうなっているのでしょうか。

---

### 幼穂・同伸葉同分ゲツ

「ようすい」と読みます。出穂は「しゅっすい」です。不耕起栽培と同時進行のレンゲ慣行田も実は孕んでいました。臨月です。2〜3 日すれば出穂すると思われます。地元農家の稲はどうかと一本失敬して茎を裂いて調べてみました。丁寧に裂くと茎の先端に 5 ミリぐらいの産毛に包まれた白い幼穂が現れます。これが稲の赤ちゃんです。追肥時期を探るために農家はいつごろ穂が出るかと挨拶代わりに交し合うと聞きますが幼穂が出来てからほぼ 30 日が出穂です。この田の茎にも見事幼穂が形成されていました。一週間には穂が出ているでしょう。産婦人科医になった気分です。こちらは第 5 節間が伸びていませんので草丈が見劣りをします。稲には同伸葉同分げつの理論がありますので伸びなかった分、分げつが少ないと思われます。

出穂はどの田も早いと言うことのようにです。やはり異常気温が原因しているのでしょうか。

---

### 収量予測

「穂が出た」と不耕起栽培普及会の武原事務局長に電話で報告すると「そうなのよね、早い」という答えが返ってきました。どの田もそうかと内心ホッとします。「分ゲツがあまり取れていないので収量が落ちてしまう。要するに子供の身体で、子供を作ってしまったの」のだそうです。寒い頃から野性的にたくましく育てと、祈る思いで手塩にかけてきたのにまったく、親の心子知らず、まだ子供のくせして、何たることかと怒っても仕方ありません。出来ちゃったのですから。「でも何か急いでいるのよね」と武原さん。「何かあるのかしら」と預言者のようなことを仰います。なまが地震を予知するように、稲も天変地異を事前に察して子孫保存の為に本能的に種子を早く作ってしまう。なんとなくありそうな話です。この秋の地球の鼓動に注意深く観察する必要があります。冗談として書き始めましたが何故か真実味を帯びてきました。1993 年の冷害時、「稲は冷害を知っていた」と岩澤さんは語っていました。今年は暑すぎる異常気象が続きます。

---

### 異常気象

天変地異説とは別に今年の熱波は異常です。観測史上最高記録がニュースをにぎわします。この異常気象はいわゆる「フェーン現象」の仕業だそうです。南からの湿った暖かい風が日本海側から吹き込んで山脈にぶつかり、日本海側に豪雨、太平洋側に乾燥した熱風を吹き込むと言う構造のようです。これだけならいつもの夏の空模様ですが、今年は攻めぎ合う二つの勢力が極めて強力なのだそうです。昨年フランスで多数の死者を出した猛暑のメカニズムが日本で発生しているようです。9月も残暑が厳しく長い夏になりそうです。

---